文化と自己知覚

—自己評価のバイアスの日米差—

○唐澤真弓¹・北山忍²・Mesquita Batja³ (非会員)

(¹ 東京女子大学・現代文化学部、² University of Michigan, ³ Wake Forest University)

Key words: 自己批判、自己高揚、文化比較

目的

自己の性質はよりよく見えるものなのだろうか。それとも自己の性質に限って足りないところが目立ってしまうのだろうか。自らの特性をよりよく感じる傾向は自己高揚と呼ばれ、欧米では非常に広く見いだされ、相互独立的自己の特徴とされている。一方、自らの特性に欠けている点を感じる傾向は自己批判と呼ばれ、日本をはじめとする東アジアの諸国でしばしば見いだされ、相互協調的自己の特徴と考えられている (Heine, in press; Kitayama et al, 1997)。

従来、自己評価のバイアスを検討する場合、自尊心や能力判断など自己の一般的評価を検討するのがほとんどであった。そのため自己評価の文化差は、自尊心など一般的かつ抽象的レベルに限られるという可能性がある。しかし一方で、近年の文化心理学の理論が主張するように文化の効果は自己知覚全般にわたっているという可能性もある。その場合、たとえ非常に具体的な自己特性を知覚する際であっても同様の文化の違いが見いだされるはずである。

ここでの問題を解決するためには、ある一定の具体的特性 (たとえば、「わがままである」) の評価が、自己によってなされる場合と第三者による一般的評定の場合で果たして異なってくるかどうかを検討する必要がある。一般的評価と較べて自己評価は高いであろうか (自己高揚)、それとも低いであろうか (自己批判)。唐澤 (2001) は、この手続きを用い自己批判が日本人では顕著であることを示したが、現在のところ同様のデータは他には存在しない。そこで本研究では、同様の手続きを用い、具体的特性の評価を分析した場合、アメリカ人では果たして自己高揚が見られるのか、さらにクラスメートなど内集団の他者の特性の評価に関してはどうかかを検討した。

方法

被験者 日本人大学生男女計 61 名、アメリカ人大学生男女計 123 名が 7 つのクラスで参加した。

手続き まず被験者は、自らの「趣味、性格、行動、そして所属しているグループなど、いろいろな特徴」を思いつくままにあげるよう教示された。手渡された質問紙の上部には 10 の横線がひかれており、被験者はこれらの線上に自己特性を最大 10 まで箇条書きした。次いで、それら特徴のそれぞれがどの程度望ましいものかを 7 点尺度で評定し、質問紙の下部にある回答欄に記入した。この際、反応は一切匿名であり、名前は書く必要のないことが強調された。この後、実験者は被験者に (特徴の記述が書かれている) 質問紙の上部を (評定値が書かれている) 下部から切り離すように求め、切り離された上部を回収し、次いでそれらをシャッフルし、ランダムにクラスに再配布した。それぞれの被験者は、別のクラス内の被験者の自己記述を受け取った。この時点で被験者はそこに書かれた特性の一般的望ましさを判断し 7 点尺度上の評定値をそれぞれの特性の横に記入した。

日本では 429、アメリカでは 1230 の自己特性が得られた。これらのそれぞれに関して一般的にはどの程度望ましいと判断されるのかを求めるために、同じ大学の日本人大学生 64 名、アメリカ人大学生 84 名に、上で得られた特性を提示し、一般的望ましさを評定させた。この際、①特性の記述者と評定者の性が一致し、②各評定者は 120-180 の評定をし、③各特性、最低 8 の評定値があるよう配慮した。各特性の自己評定値から一般的評定値を引き自己バイアスの指標とした。また各特性の他者評定値から一般的評定値を引き他者バイアスの指標とした。それぞれゼロより大きい場合に高揚傾向、小さい場合に批判傾向を示す。

結果

自己バイアス 被験者毎に自己バイアスの平均値を求めたところ、アメリカの平均値 (.17) はゼロより有意に高かった ($t=3.42, p<.01$)。過去の結果に一致し有意な自己高揚が見られる。一方日本の平均値 (-.17) はゼロより有意に低い ($t=2.49, p<.001$)。この結果は自己批判を示す。よってこれは唐澤 (2001) の結果を追認している。文化 X 性の分散分析にかけたところ、文化の主効果のみ有意であった ($F=16.97, p<.001$)。

他者バイアス 被験者毎に他者バイアスの平均値を求めたところ、アメリカの平均値 (.16) はゼロより有意に高かった ($t=2.43, p<.001$)。これは、他者高揚が見られていることを示す。一方、日本の平均値 (-.06) はゼロとは有意に異ならなかった ($t=.62, n.s.$)。

考察

本研究では、ある特定の特性の望ましさの知覚が、その特性を自分に属しているものとして判断するか (自己判断)、クラスメートの誰か一人に属しているとして判断するか (他者判断)、それとも一般的に判断するか (一般的判断) でどのように異なるかを日米で検討した。一般的判断を基準に自己判断がどのように異なるかを見たところ、アメリカでは自己高揚が、日本では自己批判が非常に顕著に見られた。この結果は、文化の影響が、自己の一般的評価ばかりでなく個々の具体的特性の評価にまで及んでいるということを示している。

一方、他者バイアスの結果は今後さらなる検討を要する。アメリカ人は有意な他者高揚の傾向を示した。これは一見、自己高揚の傾向と矛盾する。また日本人の他者高揚傾向は有意ではなかった。ここにみられるデータの不一致とそれに伴う理論的問題を解決することは今後の課題である。

第 1 に、アメリカ人の他者高揚効果は、「自分のクラスメートは、自分の知り合いである以上望ましくてしかるべきだ」という一種の自己高揚的反応であった可能性がある。この場合、各被験者の自己判断に見られる自己高揚と他者判断に見られる他者高揚の傾向は正の方向で相関してしかるべきである。今回、特性のそれぞれを実際に評定したのが誰だったかは記録しなかった。よって残念ながら、ここでの相関は求めることができない。第 2 に、他者高揚とは基本的に他者に好感を与えたいというところからくる自己呈示であった可能性もある。実際、他者判断の際、匿名性に関する教示は一切なされなかった。そのため今回の日本人被験者は (何らかの理由で) 匿名性を仮定したため他者高揚を示さず、またアメリカ人被験者は (何らかの理由で) これを仮定しなかったため他者高揚を示したという可能性がある。

これらの問題にもかかわらず、今回、少なくとも自己判断に関してはアメリカにおける自己高揚と日本における自己批判が、自己特性の評定という非常に具体的なレベルで明白に見られることを示した。この点は、自己知覚のプロセス全般が文化と密接に結びついているとする文化心理学の理論的見解を支持するものである。

引用文献

- Heine, S. J. (in press). Culture and motivation. In S. Kitayama & D. Cohen (Eds.). *Handbook of cultural psychology*. Guilford.
唐澤真弓 (2001) 日本における自他の認識：自己批判バイアスと他者高揚バイアス 心理学研究 vol. 72, 195-203.
Kitayama, S., Markus, H. R., Matsumoto, H., Norasakkunkit, V. (1997). Individual and collective processes in the construction of the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1245-1267.

(KARASAWA Mayumi, KITAYAMA Shinobu, MESQUITA Batja)